

複言語・複文化プログラムから得たもの

1. 韓国のことばと文化を学んで

前半の韓国語と韓国の文化を学ぶプログラムにおいて、私は韓国語をほとんど習得せずに研修に臨んでしまったため、韓国語を学ぶということのストレスがすごく大きかった。授業の中で韓国語を韓国語で学ぶ直接教授法がとられていたため、先生が何を言っているかわからないということがしばしばあった。ハングルがなんとか読めるというレベルで、韓国での生活を送ることは自らの負担となることが多く、新たな文字を習得することの大変さを、身をもって感じた。生活をする上で、日本語や英語はほとんど通じなかったため、現地の言葉が全くわからないという経験をし、日本にいる間に韓国語をもっと身につけておけばよかったという後悔がある。しかしながら、こういったストレスが韓国語学習のモチベーションとなった部分が非常に大きいと感じる。次第に聞き取れる単語が増え、少しではあるが、実生活において韓国語でコミュニケーションをとることができるようになっていった。3週間という短い期間でありながら韓国語の能力を高めることができた要因の一つとして、釜山外国語大学の外国語学習の方法もあると思う。実生活に即した授業を行っていたため、すぐに使える表現を多く学ぶことができた。実際に外国語を使用して何ができるようになるかということに主眼が置かれ授業が構成されているため、授業で習った韓国語を生活の中で使いやすく、Can doに基づく学習法の良さを実感することができた。また、授業の中でコンビニに行き買い物をするという活動があった。実際の活動で韓国語を使う場面が設けられているのは、韓国語に関わらず外国語を日本で学んでいたらできないことであり、現地で現地の言葉を学ぶメリットを感じることができた。直接教授法についても、ストレスを感じることは多かったが、先生の表情やジェスチャーから覚えることができた語彙が多く、分かりやすい一面もあった。

韓国語を学ぶ中で、日本語と韓国語は似ていると感じる点がすごく多かった。語順や、漢語由来の言葉などは日本語にすごく似ていた。また、研修に参加していた他大学の学生は九州の学生が多く、九州の方言には韓国語由来のものがあると教えてくれた。言語の面から、韓国と日本の距離の近さについて感じることもできた。

前半の研修では、韓国語の授業だけでなく、韓服や韓国料理、ダンス、歌の体験、慶州旅行など、韓国の文化にたくさん触れた。また、現地の学生と様々な場所に遊びに行くこともあり、この現地の学生との関わりは自らにとってすごく大きかった。互いの言語を教え合ったり、文化について話し合ったりする時間は有意義なものであったと感じる。この表現はこういった場面では使わないということや、どのような表現が実際の会話の中で使われているのかといったことについて母語話者から聞くことができたのは、韓国語を学ぶ上で非常に興味深かった。帰国してからも彼女との連絡が続いており、日本語について質問されたり、韓国語について質問したりしている。互いの言語を学習している者同士、学びはかなり深まったと思う。しかしながら、韓国にいる間も、現在のメッセージでのやりとりも全て日本語で行っているため、こちらに合わせてもらっているという意識があり、そういった点では対等でないように思う。韓国語の学習を続け、韓国語でも、日本語でもやりとりできるよう韓国語能力を高めていきたい。

2. 日本語教育実習

後半のプログラムにおいて、教育実習を行った2週間はとても濃いものとなった。始めに実際の日本語教育の授業を見学した。担当教員以外の先生の授業を見学することもあり、

それぞれの先生がどのような授業をするのか見ることで、すごく参考になった。先生によって授業の進め方がかなり違ったが、どの先生も学生に問いかけて授業を進めるという形を多くとっていたように思う。いろいろな先生の授業を見学できるのはなかなかない機会であるため、貴重な経験であった。私は A2 レベルのクラスを担当したため、A2 のクラスを見学したが、ひとくちに A2 レベルと言っても各個人によって日本語の能力は様々であり、クラスによって学習者のレベルにも少し違いがあった。どのような学生が集まっているかによって、授業の内容や話し方などを工夫していく必要があると認識した。

いろいろな授業を参考に、教案や資料を作成し授業を行ったが、実際の授業では想定していた通りに行かないことがあり、臨機応変に対応することの大切さと難しさを感じた。日本語をたくさん知っていて、積極的に発言する学生に合わせて授業を進めてしまうところがあったが、そうでなくあまり声を上げられない学生にも配慮して授業を行うよう指導された。クラスの中で学習者の日本語のレベルに開きがあるほどどうやって授業を進めるか、難しくなっていくと思う。どういったクラスであっても、学習者に寄り添う授業を行うことが非常に大切だと感じた。

Can do に沿った授業を考え、実践することは、とても面白かった反面、すごく難しかった。学習者の生活に役立つような授業を行うために、どういった場面を設定するのか、そのような語彙や文法を扱うのか、考慮すべきことがたくさんあり難しく感じた。しかしながら、Can do に基づく授業というのは非常に実践的なものであると思う。前半で韓国語を学ぶ際にも感じたが、習ったことを日常生活の中で使用するというところに注目されているため、実生活に役立つ点がすごく多い。後半の研修では、実習生一人に対して韓国語学生一人がチューターをしてくれたが、私のチューターが次のような話をしていて、彼女が以前日本に来た際に、道に一人で迷ってしまい、調べる術もなかったため、日本人に道を聞いた。その時に、「日本で道を尋ねる」という日本語の授業を受けていたため、その授業で習った表現を使って日本人に目的地までの道を聞き、無事に辿り着くことができたそうだ。この話を聞いて、Can do 記述文に基づく授業というのは大変実生活に即したものであると再認識した。日本語の授業を行う者として、授業の内容が学習者の生活に生きているのだと感じることができ、嬉しく思った。また、授業の内容を実生活に生かせるような授業をつくることの大切さを改めて学んだ。

3. 複言語・複文化プログラムについて

今回のプログラムでは、自国の言語を教え、文化を伝えるだけでなく、現地の言語や文化を学ぶことができたため、日本語教師としての立場だけではなく学習者の視点を身につけられたのが非常に良かったと思う。日本語教育実習だけでは、外国語を学ぶ者としてどういった点が困難なのか、どのように教えてもらったらわかりやすいのかなどといった点について理解するのは少し難しいと考える。非母語話者として日本語を学ぶ場合には、今回韓国語を習得する上で体験したのと同様に、新たな文字を習得しなければならないため、日本語学習者の立場を理解するのに繋がったといえる。また、韓国語の知識を身につけることで、韓国語母語話者が日本語を習得しようとする時、どのような点で母語からの干渉があり、誤用に繋がってしまうのか理解しやすくなったと思う。学習者の母語について学ぶことで、より学習者に寄り添う授業ができたのではないかと考える。

韓国に行くまでは、釜山でのデモや不買運動などのニュースから、韓国にあまりいいイメージを持っていなかった。周りの人からも渡韓を心配されたが、実際に韓国で生活してみると、危険を感じるようなことは全くなかった。日本人だからといって悪い目を向けられたりすることはなく、むしろ優しくしてくれる人がほとんどだった。渡韓以前はそういったバイアスを通して韓国という国や韓国人を見ていたのだと反省した。

日韓学生フォーラムに向けて、日本と韓国の歴史について調べた。今回の研修を通して実際に韓国に行くということがなければ、メディアに操作されたイメージだけを根拠に日韓関係の諸問題について考えていたと思う。韓国のメディアではどのように報道されているのかということや、韓国で生まれ育った人、今回は同じ世代の学生の意見を聞くことで、自分の中での韓国に対する印象は大きく変化した。正確な歴史を知り、問題について自分のこととして考えることが非常に大事であると学ぶことができた。また、調べていく中で日本の歴史教育に疑問を抱くことが何度かあった。日本が被害者となった歴史はたくさん教えられてきたけれど、日本が他国にしてきた酷いことに関して、世界史や日本史の授業の中で教わったかと考えると、少し疑問が残る。日本が外国に与えた被害についてもきちんと教育がなされなければいけないのではないかと感じた。そういった歴史を学ぶことで、自他をクリティカルに見つめるということができるようになるのではないと思う。フォーラムの中で、アジア全体として一つの教科書を作るという意見が出ていた。これを実現させるのはすごく難しいことだけれど、各人が正しい認識を持つことに繋がると思う。

韓国の学生から、日本の若い世代の人は政治や歴史について、あまり関心がないのではと言われることがあった。チューターと話していても、日本の大学生よりも自国に関して知識を持っている印象を受けた。韓国の文化や歴史、政治について学ぶと同時に、日本の状況についても知識を身につけることが、対等な立場で議論をするのに必要不可欠だと感じた。

今回フォーラムという場で学生同士対話をするのができたのは、とてもいい経験だったように思う。しかし、今回のフォーラムの参加学生は、日本に興味があり日本語を学んでいる学生であったこと、日本語を介して行われたことなどは、少し改善の余地があるように感じた。日本に対してあまりいい印象を持っていない学生とも対話をしてみたいと思った。

日韓関係が最悪と言われる中で韓国に行って文化に肌で触れ、現地の人と関わることを通じて学ぶことは多くあった。相手の立場に立って考えるということについて、そういった考え方を身につけてきたと思っていた。しかしながら、国と国の問題について考える際に、無意識のうちに自国中心の考え方しかしてこなかったのだと気づいた。フォーラムの前に日韓の慰安婦問題について調べる中で、日本が度々韓国に対して謝罪をしてきたという事実を知り、なぜ謝罪をしているのに韓国の人々は幾度も謝罪を要求するのだろうと疑問に思った。フォーラムの講義を受け、それは異文化を理解できていないことから生まれる疑問だと理解した。韓国の人々は心や気持ちを大切にする傾向があり、誠意のこもった謝罪を求める一方で、日本の人々は形式を重視する傾向があるという話があり、腑に落ちた。本当の意味で相手国の立場に立って考えるということは、その国の歴史をきちんと理解し、どのような思想をその国の人々は持っているのか、行動の裏にある考え方について、理解し自分なりの意見を持つことだと考えた。そういったことについて頭で理解しているつもりでいたけれど、今回の研修を通してそうではなかったことに気づかされた。また、日本を国内からの視点で考えるのではなく、国外から見つめることで、日本の国について客観的に考える視点が身についたように思う。

私がこの研修に参加しようと思った最初のきっかけは、日本語教員の資格を得るために必要な単位を取得するためである。参加する前は韓国に対する興味が全くなかったため、このような機会がなければ韓国について深く知り、考えることはなかったのではないと思う。8月15日、日本では終戦記念日として慰霊者を追悼するけれど、韓国では光復節として日本の支配から脱出したことを祝う日として重要な意味を持つ日であるということを実際に韓国に来るまでは知らなかった。今回のプログラムに参加した一人として、韓国の実際の状況や感じた雰囲気について、周りの人に伝えていけたらと思う。日本において、

メディアのイメージから嫌韓感情を抱く人は非常に多いと考える。そういったイメージを払拭し、日韓や東アジアの共生に繋げていくために、学生としてできることを考え行動に移していきたい。学生一人一人にできることは大きくないかもしれないが、次世代を担う者として、長期的に考えた際に国際関係が改善することを願っている。

終わりに、今回のプログラムに際してご指導いただいた森山先生、並びに釜山外国語大学の先生方に心より感謝申し上げます。

複文化・複言語について考え続けた5週間

1. 韓国のことばと文化を学んで

8月9日から8月27日までの約3週間、韓国語・韓国文化研修に参加した。

私は、目標言語を用いて教授する直説法の授業を初めて受講した。自分が学習者として直説法の授業を体感することで、その短所や長所を、身をもって感じる事ができた。

まず、私が感じた直説法の短所を挙げたい。私のクラスは初級レベルであったが、生徒によって単語や文法の知識に差があった。教師がアイスブレイクとして韓国語で質問する場面が何度かあったのだが、クラスの中で学習が進んでいる一定の生徒ばかりがその質問に答えて、残りの生徒はただ聞いており、理解できないまま会話が進むという状況だった。このように、クラス内でレベルに差があるときは、目標言語の単語の知識が少ない学習者にとって、ある種のアクティビティは、不安感を感じることや、やる気の喪失に繋がりがかねないと感じた。しかし、他の教員は、ジェスチャーを使いながら、あるいは、イラストを書きながら説明をしていた。これらの工夫は、全ての学習者が指示内容を理解・予測し、同じペースで授業を受けることができるという点で大変効果的であると感じた。その他にも、理解できている学生に学習者の母語で説明させてクラス内で共有したり、遅れている生徒には個別でフォローを入れたりすることで、このような状況を回避できるのではないかと考えた。

一方で、韓国語研修の中で直説法の授業の長所を感じることも多かった。間接法よりも多量のインプットが効率的にできるという点である。私が研修中に覚えた単語数は、私が同期間で英語や第二外国語を間接法で勉強した際に覚えた単語数よりも多いと感じた。さらに、教師に質問をする際などにも、習った表現やジェスチャーを最大限に使って質問しなければならない。自分の母語が使えない状況に置かれることで、なんとか伝えようという姿勢を育むことが期待できる。また、教師と生徒の会話を観察することで、ネイティブの相槌の打ち方をも知ることができた。

授業には、自己紹介の仕方、場所の尋ね方、注文の仕方など、韓国に留学中の学生たちがすぐに実践できる内容が多かった。実際に韓国語を使えたという喜びは学習者のやる気向上にもつながると感じた。直説法の授業を実際に自分が生徒として受講し、教師の様子を観察することで、生徒の要望や気持ちを体感するとともに、自分が直説法の授業をする際のイメージを掴むことができたことは、後半の教育実習において大いに役立った。

ここからは、韓国の文化について述べていく。韓国で暮らし始めてはじめてのうちは、寮のシャワーカーテンがないこと、トイレのティッシュをバケツに捨てることなど、小さな違いがちょっとしたストレスだった。しかし、いつからかその違いを意識しなくなり、帰国する頃にはそれが当たり前のようになっていた。日本に帰国すると、やはり慣れ親しんだ文化が一番だなと感じたが、実際に文化に触れ、継続してみることは、多文化理解の上でかなり効果的だと感じた。K-POP や韓国ドラマにもさほど興味がなかったのだが、韓国語を学んだことで、わかる語が聞こえると嬉しかったり、いざ見てみると案外面白かったり、体験してみて初めて感じる事がたくさんあった。

2. 日本語教育実習

日本語教育実習では、担当教員との面談や授業見学を行いつつ、教案・教材を作成し、2回にわたる授業を行った。私のクラスは、A2であったが、同じクラス内にも、卒業単位のためにA1とA2を同時受講している生徒から、日本のドラマやアニメに強い関心があり、

豊富な日本語の知識を持った生徒までおり、レベルにばらつきがあった。

釜山外国語大学校では、Can-do の考え方を取り入れており、定められた教科書がない。私は実際に教案作成・授業を行う中で、この教授法の素晴らしさを大いに感じた。教案を作成する際は、学習者が実際に遭遇しそうな場面を想定し、語彙や文法、アクティビティを構成していくため、日本語母語話者である教師が必要であると考えた実用性の高い表現を優先して教えることができる。最初の面談の際に、先生が「最近はコミュニケーションが苦手な学生が増えているから、どんな人材に育って欲しいかまで考えて授業ができるといいね」とおっしゃっていた。そこで、私も教案に生徒同士で話し合い、協力しながらできるようなアクティビティを増やしてみた。また、学習者が実際に日本で過ごしたり、日本人と触れ合ったりする可能性を考慮して、日本語だけでなく、日本と韓国の文化の違いにも触れ、実際の場面でより円滑なコミュニケーションを図ることができるような授業を目指した。さらに、授業の初めの段階で場面や Can-do を導入することは、学習者が目標の文法項目や表現を覚える必要性をより身近に感じながら積極的に授業に参加することにつながると思う。教師の志向によって授業の内容に違いが生じるが、目の前の学習者のニーズに従って、生徒の人材育成なども視野に入れ、様々な指導内容の可能性を模索できるのも決められた型がないからこそである。

初回の授業では、自己紹介の場面を取り上げた。ポートフォリオに乗っていた必修語彙と、それと同じレベルの語彙を自分なりに追加して単語を導入したのだが、想定していたよりも紹介した単語をすでに知っていた生徒が多く、予定していた所要時間よりも早く進んでしまった。応急処置として、授業の最後にもう一度単語の復習を入れたが、後に考えると、既知の単語を復習するよりは、黒板を使って新しい単語をさらに追加したり、もっと新しい文型の練習をしたりしたほうが学習者にとって効果的であったのではないかと反省した。また、指示の出し方にも課題が残った。単語を教師に続いて復唱させるつもりだったのだが、声を出してもらえなかったり、逆に復唱しなくていいところで繰り返そうとする学習者がいたりした。単語のような反復練習では、一つ一つの単語ごとにリズム感を持って、「さんはい」といった掛け声等も用いることが重要であると感じた。

2回目の授業では、他己紹介の場面を取り上げた。前回の反省を生かし、単語の難易度を上げた。すると、前回よりも簡単に答えが出てくるものが減ったため、学習者のレベルにあった単語を導入できたと感じた。また、予定していたよりもグループ活動が長くかかってしまい、アクティビティを減らさざるを得なかったのだが、授業全体の構成を考えて必要な活動と必要性が低い活動を冷静に取捨選択できたことは、初回の授業の時間配分という反省を生かすことができたと考えている。

初めての授業で、反省する点は多々あったが、一人一人の生徒に話しかけ、レベルの高い生徒にはより質の高い質問をし、活動が遅れている生徒には、ヒントを出したり、間違いを指摘したりしながら、それぞれの生徒のレベルを考慮して授業を進行できた点はよかった。一方で、学習者の母語をより深く知ることで、間違いのパターンや母語の転移の影響を踏まえてより良い授業ができたとも感じる。時間配分や指導項目以外の質問など、想定外の事態を事前にある程度予測して準備することや、そのような事態に対する対応力、そして全員に期待したことを実践してもらえようとする指示の出し方などは、これから先、どの分野の仕事をする上でも必要な能力である。実際に生徒の前に立って授業ができたことはとても良い経験であった。

3. 複言語・複文化プログラムについて

以上の韓国語・韓国文化研修と、日本語教育実習、そして、日韓学生フォーラムを通して、その良かった点と、良くなかった点をまとめたい。

良かった点は、プログラムの内容が日本語教育実習のみに限られていないことである。まず、上記にも述べたように、韓国語研修の間に、直説法の授業を体験し、イメージを掴むことができた。また、教師の立場としては、日本語を教える“あげる”という意識を持ってしまいがちであると思う。しかし、事前に韓国語を勉強し、相手の言語や文化を理解しようと努めた後では、生徒を、自分の母国語を学んで“くれて”いる存在と認識し、自分も教える以上は相手の言語も知らなければという対等な気持ちで授業に臨むことができた。また、チューターをはじめとした韓国人学生との交流や、韓国文化体験を経験したことは、単に言語を教えるだけでなく、互いの国民性や文化を理解し合えるような授業をしたいと、より包括的な視野をもつことに繋がった。

良くなかった点としては、フォーラムに参加する韓国人学生が親日派に偏ってしまう可能性が高いということである。日韓関係のことを話し合うため、日本語の授業履修者に参加してもらわねばならないという点では、仕方ないとも思う。しかし、日本語学習者は日本語・日本文化に対して好意的な印象を抱いている可能性が高く、それと同様、政治的な話題についても日本の態度を肯定してくれるような学生が多いのではと感じた。

本研修を終えて、研修前を振り返った時、私が1番に感じることは、今まで私は韓国を知らなすぎたということである。自分の専攻の関係で、これまでも日本と諸外国の関係について考察することは何度かあったが、その対象は、世界をリードするような大国ばかりであった。この研修に参加することで初めて、隣国である韓国と日本について全くといっていいほど気にかけてこなかったということに気づくことができた。長い滞在期間中には、仲良くなった友達や日韓学生フォーラムで同じグループになった韓国人学生と、日韓関係について何度か話し合うことができた。事前に慰安婦問題などの歴史的な流れについて調べた際は、日本側は謝罪をしてきたし、韓国側もそれを一旦受け入れたのではないのか、韓国では大統領が比較的短期で交代になるため、国民の反日感情を利用して支持率を集めようとしているのではないかと、この問題に関しては日本側が正しいと考えた。しかし、森山先生のご講演で、韓国は心・気持ちを大切にす文化であるから、日本側がまだ謝っていないように感じるというお話があり、自分の持っていた考えが、無意識のうちに自国中心的になってしまっていたと気づくことができた。韓国人の心・気持ちを大切にすという国民性、そしてそれに伴う日本の対応への不満の正当性は、私が韓国にきて、実際に韓国人と触れ合ったからこそ真に理解できたことなのではと思う。互いに友好的な関係を築きながらも、時にセンシティブな話題について、率直な意見をぶつけ合うことは、無意識のうちに持ってしまう相手への先入観や自国中心的な考え方を捨てて、両国の未来について考えるいい機会なのだと痛感した。

4. 韓国人との触れ合いを通して

私は初めて韓国を訪れ、約5週間生活をした。昨今の日韓関係の悪化のため、長く韓国に滞在することはとても不安だった。大別すると、歴史的な背景や今回の輸出規制による不満を日本人に対して表明する人と、政府間のことは政府間のことであって、民間人は別であると考える人がいると思う。実際に訪れてみて、私は後者の割合が高いと感じた。街中で“NO JAPAN”と書かれたポスターを見かけることもあったが、日本人だからといって拒絶されるようなことはなく、むしろ日本人と分かった途端、料理の食べ方を教えてくれたり、道を教えてくれたりと、好意的に接してくれる人がたくさんおり、韓国人の温かさを感じる事ができた。

また、私が接した韓国人は、何事に対しても一生懸命で、行動することを厭わない人が多かった。大学での勉強に精を出す姿は、同じ学生として学ぶものがあつたし、政治についても関心を持ち、しっかりと自分の意見をもっている学生が日本に比べて多いと感じた。

このような傾向が、政治の問題に関する韓国側は強く反応し、日本側は穏やかな反応をするという対応にも表れているのかとも思った。

このような時期に韓国に訪れたことは大きな意義があったと考える。実際に韓国人と交流することで、より韓国人や韓国文化を身近に感じ、そして同じ東アジアの住民として、韓国で起こることについて当事者意識を持つようになった。両国の関係改善のために私たち学生にできることは限られているかもしれないが、今後も交流を続け、良い関係を維持したいと考えている。

日韓から東アジアの未来を考えるきっかけに

1. 韓国のことばと文化を学んで

日本の隣国に位置する韓国だが、一步踏み入ることで全く知らなかった「韓国から見た韓国」と「韓国から見た日本」を知ることができた韓国語実習であったと思う。

韓国語短期研修では、韓国語母語話者である先生が韓国語を用いて韓国語を指導してくださった。その際に、先生は「直接教授法」と「クラスの雰囲気作り」を徹底して行っていた。韓国語を韓国語で学ぶ直接法は、外国語を今まで日本語で学習してきた私にとってとても衝撃を受けた授業だった。生徒の母語を一切使用せず、先生のジェスチャーやイラストで補足しながら説明されるのだが、慣れないうちは先生の言いたい事が全く耳に入らず、戸惑いと苛立ちを覚えていた気がする。しかし、繰り返し先生の話す言葉を聞くことで、韓国語を聞き取る力や正確な発音といった能力が付き、授業の後半には簡単な日常会話であればなんとか意思疎通ができるようになった。また私が所属していたクラスの雰囲気として、生徒の多くは韓国語を K-POP や韓国ドラマに憧れて勉強する人たちばかりであった。そのため、韓国のサブカルチャーが分からない私は度々授業で話題になるアイドルやアーティストの事が分からず困惑し沈黙することが多かった。そうした韓国のサブカルチャーがわからない生徒がクラスに 2, 3 人いることを先生は授業の合間に把握していた。そのため、先生はクラスの生徒が授業の中でより実践的な韓国語に触れるために韓国語による創作活動をしたり、カフェで韓国語によって注文する活動をしたりする機会を多く増やした。このように先生が生徒への細やかな配慮をしてくださったことで、学習者として韓国語学習へのモチベーションが高まったと思う。私自身も日本語教師として日本語を教える際には、日本語を学ぶ生徒の多くはマンガやアニメが好きだと思い込んで授業を進めるのではなく、日本語を勉強するモチベーションを上げる体験や話日本の文化についての説明を授業の中でたくさん提示していきたい。

また、韓国語実習の一環として、文化体験、交流会が行われた。文化体験として、大学の授業内に縛られることなく、伝統楽器演奏、韓国料理教室、韓服体験などを体験した。

交流会では、釜山外国語大学の大学生パートナーを含む日本人大学生グループが編成され釜山と一緒に楽しんだ。交流会の中で、釜山に住む人にしか知らない穴場スポットを巡ったり、韓国料理を食べたり、韓国語の若者言葉や方言を教えてもらったりととても有意義な時間になった。特に印象的であったのは、大学生パートナーから聞いた韓国の兵役についての話だ。私の大学生パートナーも 2 年の冬から一年半ほど行くので、兵役の間に日本語を忘れてしまうのではないかと不安に感じていた。また日韓の相違点の 1 つでもあるため、グループ内で兵役について熱く語り合ったりもした。そんな仲間たちとは 2 週間しか一緒にいなかったが、今でも連絡を取り合うほど仲良くなった。

韓国でのおよそ 1 ヶ月間の生活において、日韓の政治的関係があまり芳しくない中で街に出ることは正直とても勇気のいることであった。釜山を巡る中で見かけた公共交通機関に貼ってある「NO JAPAN」というポスターの重みに、日本人として大きなショックを受けたこともあった。友人の中には日本人であるだけで店から出された人もいた。一方で、道に迷った時に駅まで案内としてついてきてくれた韓国人がいたり、怪我をした人がいたら真っ先に絆創膏を買ってきたり目上の人への礼儀が正しかったりする所は日本と似た所を感じ、嬉しく思った。生活の中で感じたことは、韓国人の 1 人としては日本人に対してマイナスの感情を持つ人は少ないということ。しかし国レベルの話になると韓国人の反日感情は大きく膨らんでいくということである。人は誰もグループになると気が大きくなっ

てしまう現象があることは知っていたつもりであった。しかし実際に異国で見た「韓国」というグループの目は日本人にとっても日本文化にとっても想像を遥かに超えるものであった。

このように前半の韓国語実習では、現地で韓国語を学び生活に活かす場面が多くあった。隣国である韓国のことばと文化を学ぶことは、日本という国を改めて見つめ直す鏡でもあり後の日本語教育実習に大きな役割を果たしたと感じる。

2. 日本語教育実習

9月1日まで9月11日までのおよそ2週間は韓国語実習に比べてあっという間に過ぎていった日々であった。私達自身が先生という主体になって活動しなければならなかったため、生徒であった韓国語実習の時よりも責任が授業について回ったからである。日本語を留学生に教えたりした経験はあっても、先生として学習者に日本語を指導する事が初めてであったため本当に濃い経験になった。

前半には、授業見学として自分が受け持った授業以外にも、先生や他の実習生の行う授業を見学したり授業サポートとして参加したりした。Can-doの概念に沿って、先生たちの個性が生かされている授業が展開されていくのを間近で見学することで、授業の多様性を感じることが出来た。

しかし、授業見学の期間を終えて初めて行った教壇実習では、私が一生懸命作っていた教案も教材も意味がないように思えるほど自分が思い描いていた授業ができずじまいであった。意識しようとしていた声の大きさ、生徒への気配り、時間配分はもちろん、授業後、生徒から教育実習はいつ終わるのか、ペアワークに意味はあるのかと聞かれた時は、自分が生徒に何をもちたことが出来たのか、私の授業で日本語への興味が薄れてしまうのではないかと本当に悩んだ。

その後1回目の授業を振り返ってみると私が見落としていたことがいくつも出てきた。学習者が韓国と中国、台湾出身者であり、レベルにも大きな差があること。そのため私が韓国語で補足説明しても理解ができていない学習者が多かったこと。漢字で書いた文字の方がひらがなより意味が分かりやすいと感じる学習者がいたこと。兵役で数年間日本語から離れてしまっていた生徒がいたこと。これらを事前にもっと知っていれば全員が日本語を理解できる空間づくりが出来ていたのではないかと。学習者の身になって考えることが不足していたから招いた事態ではないかと痛感した。

私が悩み落ち込んでいる際に、多くの日本語教師の先生達のお話を聞くことが出来た。どの先生も親身になって相談に乗ってくださり、私の授業に欠けていたこと、取り入れるべきだったことを教えてくださった。また、他の実習生の姿から多くの刺激を受けたり、受講する一人の生徒として韓国人チューターの方に助言をもらったりすることで2回目の授業の準備はより丁寧に質は明らかによくなったと思う。

2回目の教壇実習では、「全員が授業に参加している状況を作り出す」ことを目標に授業を行った。これは生徒一人ひとりの学習状況やレベルを想定して、課題を作ったり時間配分を考えたりすることである。こうすることで一人でも多くの学習者が主体的に学ぶようになると考えていた。このように、私は自分と日本語学習者の言語スキルを互いに高め合い、言語により異文化理解を深めることが日本語教育実習で行うことができたと思う。

3. 複言語・複文化プログラムについて

複言語・複文化プログラムとして、総領事館の方からのお話を聞いたり、釜山外国語大学の生徒と意見交換会を行ったりする機会を得られた。総領事館の方からお話を伺った時には、日本人としての誇りを持つ事と歴史を正しく認識する事、韓国政府の行動と日本

政府の対応についてお話を伺えた。フォーラムでは、積極的にコミュニケーションを取り、個人的な距離感を縮め、忌憚のない意見交換等が出来るようにするとともに、押しつけとにならないように配慮しながら日本語教育及び日本人の価値観、日本で今取り上げられている日韓ニュースを紹介するように努めた。またハングル語及び韓国文化について吸収し、相互理解を深める時間になったと考える。私の班は私以外が韓国人であったため、私一人が日本人であることは言葉の一つ一つが日本人のイメージ、価値観と直結してしまう重みがあると感じた。

本プログラムに参加し、森山先生の講演を全員で聞いた後にグループディスカッションをした事が良かった。考え方や価値観、歴史への理解が大きく異なる大学生同士が話し合うために、両国が抱える現状や国民性の違いをベースとして知っておくことでディスカッションをスムーズに行えたと思う。またトピックの1つに、相手の国の立場に立って自国の改善すべき点があったことで日韓の見つめ直すべき点が見えてきたと考える。また本プログラムが行われていても日韓の大学生のみの話し合いでは東アジアの共生に限界があると感じた。やはりこれを改善するためには、日韓のみならず東アジアの国々から大学生を招き意見交換会をする機会が与えられれば良いと考えた。色々な問題を抱える状況下である日本と韓国であっても、日常生活において国籍、文化的背景の違いに関わらず東アジアの未来を共有できたのが良かった。

4. 日本語教育の可能性

本プログラムを通して改めて言語教育の重要性と、言語が政治的・経済的に国同士の関係性に及ぼす影響力を感じる事が出来た意義のある時間であった。韓国にいる5週間の中で私は、言葉が理解できることは心の壁を取り払うことにつながると実感した。実際私が韓国に渡航した当初は、町中にある韓国語を見聞きしても理解できないという疎外感を感じていた。疎外感は韓国や韓国人への偏見、過剰な恐怖しか生み出さなかった。しかし、言語を少しでも理解し、理解している事が相手に伝わればより円滑なコミュニケーションにつながると感じた。よって言語教育、言語学習がより普及しそれに付随して相互理解と寛容性を高まれば、日韓を含めた東アジア内の文化や人の行き来はより活発になるであろう。そして言語教育を通して異文化を理解する事で差別や偏見を乗り越え、より多様な東アジアが確立するのではないかと考える。

また国内外の日本語学習者の多様化や増加に合わせて、日本語教育もまたニーズに応じた形に変化していく必要があると感じた。今後も、日韓・東アジアが共生していく術の一つでも日本に持ち帰ったことで、日本の発展に貢献できる役割を果たしていくためには何が必要であるか、日韓の動向を常に意識し続けたい。

5. 謝辞

本文は筆者が釜山外国語大学校に夏季韓国語短期研修・日本語教育実習に参加した際の学びをまとめたものである。森山新先生には指導教官として本研究の実施の機会を与えて戴き、その遂行にあたって終始ご指導を戴いた。二色博樹先生には夜遅くまで指導して頂き多くの学びを得た。ここに深謝の意を表する。並びに、本プログラムでは釜山外国語大学校の先生をはじめ、交流会で同じグループだったメンバー、チューターの学生に数々の有益なご助言を戴いた。ここに感謝の意を表する。

複言語・複文化プログラムを終えて

1. 韓国のことばと文化を学んで

8月8日から行われた韓国語研修では、韓国語や韓国の文化、そして釜山という街の土地柄を学び、感じる事ができた。

筆者が韓国語の勉強を始めたのは本プログラムへの参加が決まった4月である。韓国語の授業や昼に行われていた韓国語講座には参加する時間が取れなかったため、以前韓国語を履修していた友人から教科書を借りて自習した。しかし、学習は思うように進まなかった。原因はハングル文字である。韓国での生活の中でも強く感じたことであるが、未知の言語に触れたりその言語を学習したりする上で、そもそも文字が文字に見えないということは相当なハードルかつストレスになる。筆者がこれまで学習してきたのはアルファベットを用いる英語やフランス語、漢字を用いる中国語であったため、これは韓国語を学習してはじめて実感したことだった。本レポートではこの後日本語教育実習についても述べるが、日本語独特の文字であるひらがなやカタカナに関しても同じことが言えるだろうと思う。学習を進めるにつれてハングルが読めるようになると、それまで線と丸でできた絵のようにしか見えていなかったものが、言葉を表し、意味をなす記号、文字として眼に映るようになる感動も味わう事ができた。

このように文字のハードルを感じながらの遅々とした学習であったため、結局「時間をかければ辛うじてハングル文字が読める」というレベルにしかならないまま釜山に到着した。釜山外国語大学校における韓国語の授業は韓国語を教授言語として行われたが、最初は「書いてください」「読んでください」といった教室用語の詰め込みの量と速さについていくのが非常に大変だった。しかし、韓国語でのインプットに慣れてくると、時にインターネット上の動画等を使った韓国の文化の紹介も交えながらの授業はとても面白く感じた。

授業と並行して韓国語研修の核となった活動が釜山外国語大学校や参加した他大学の学生との交流会だ。班を組んで釜山の街で自由に過ごすというものだったが、この活動があったことで、授業で学んだ韓国語が自分のものになる感覚を得ることができた。パートナーの韓国人の学生は日本語が堪能で、交流会中はほとんど日本語で会話していたが、時々習った韓国語で話す時発音を細かく直してくれたことが印象に残っている。この期間中に機会をいただいた釜山総領事館の方との懇談会でも「単語があっても発音が間違っていると結局伝わらない」というお話があったが、発音の難しさをこれほどまでに肌で感じたのは現地ならではの体験と言えるだろう。また、交流会では多くの飲食店やカフェに立ち寄り、食文化の違いを感じる事ができた。韓国の料理は辛いものばかりという先入観があったが実際はそうでもなく、また辛さを調節できる店もあり、辛いものが比較的苦手な筆者でも食事を楽しむ事ができた。韓国人の学生の中にも「辛いものが苦手」という人が数人いて、もちろんこちらが思っているのと程度の差はあるが、「韓国人は辛いものが好きだ」という間違った先入観を持っていたことに気づかされた。

2. 日本語教育実習

9月1日から始まった日本語教育実習は、筆者にとって授業に Can-Do を取り入れることの難しさを痛感するものとなった。

筆者の場合、韓国語研修中から指導教員のS先生と連絡を取り、実習プログラム開始前の8月末に1日目の授業の教案の初稿を見ていただいた。教案を台本のように作る先生であったため、筆者もそれに準ずる形で教案を仕上げた。このことが、授業での教師や学生

の発話、授業の流れや雰囲気作りに着目する上で非常に役に立ったと感じる。実際、教案へのフィードバックや見学した授業からは、S先生は学生の関心を常に引き付けながらうまく学習内容へ意識を向けさせる、授業の流れをコントロールするということに教師の役割の重きを置かれていることが窺えた。

しかし、筆者自身の1日目の授業は、CEFRの理念を学んだ身からすれば、個人的に満足していく実践にはならなかった。Can-Doのタスクをうまく取り入れることができず、構造シラバス寄りの内容になってしまったのである。その原因は、授業のゴールのイメージが固まっていなかったこと、それ故に学生にゴールを的確に伝えることができていなかったこと、そしてゴールから逆算して導入する語彙や文型を決める作業の難しさにあったと省察する。実際場面の言語活動1つを授業の目標、達成すべき課題として取り上げるとき、その達成に必要な新出の文型は1つとは限らないし、逆に、絶対に必要である文型があるとも限らない。授業で何を扱い、学生に何を獲得してもらうのか、ゴールと具体的な学習項目とのつながりについて、それらを設定した教師自らが自信を持つことができていないと、授業の流れは滞り崩れてしまうと実感した。この反省を踏まえ、2日目の授業では無理に全てを日本語で説明するのではなく、理解の段階では韓国語も補助的に使いながら学習を進められるよう工夫をした。これによって、教師側としても特定の語彙や文型の説明に固執するのではなく、内容に焦点を当てた授業を展開する意識を持つことができたと思う。また、2日目は1日目ほど準備の時間が取れなかったこともあり、台本のように書いていた教案を表の形で書くように変更した。表にすると授業内の各活動の内容や目標がより明確になる一方、1日目の授業準備で教師や学生の発話を事細かにシミュレーションしていた経験がなければ教案から授業をしっかりとイメージして臨むこともできなかったと感じるので、授業の機会が二度あることを利用して異なるタイプの教案を作成できたことは筆者にとって非常に有意義な経験だった。

学生のレベルについてもここで触れておきたい。筆者が担当したのはB1-1クラスだったが、森山先生やS先生からも事前に聞いていた通り、学生のレベルには非常に大きなばらつきがあった。韓国特有の課題として感じたのが、従軍その他の理由で休学していた学生が抱える遅れである。筆者の担当したクラスには1年生が多かったが、1年生よりも上級生のレベルの方が低くなってしまっているという状況が見受けられた。教師以上にものかしさを感じているはずの学生を的確にサポートし、その一方でレベルの高い学生も飽きさせないように配慮する、授業運営の難しさを思い知らされた。

実習全体を通して感じたのは、「やってみなければわからない」という、いわば当たり前のことである。Can-Doに基づいた授業を目指しても、自分の根底には今まで教わる側として身についた文法シラバスや構造シラバスの考え方が染み付いていること、学生の反応を引き出し拾うことの難しさ、内心では半信半疑だった、指導の先生の「BGMを流すことで教室の雰囲気を和やかにし、学生の声のボリュームも上げさせる」という手法の力など、現場に自分で立たなければ分からなかった感覚を得ることができた。

3. 複言語・複文化プログラムについて

日本語教育実習の期間中には、本学の学生と釜山外国語大学の日本語上級レベルの学生がグループを組み、昨今の日韓関係について話し合う日韓学生フォーラムの場が持たれた。本学の学生は興味・関心の有無に関わらずフォーラムへの参加をあらかじめ義務付けられていたが、釜山外国語大学の学生も、必ずしも政治や歴史などの深い話をするという趣旨を把握し承知した上で参加したというわけではないようだった。すなわち、「フォーラムやそこで持たれた話し合いへの参加は、与えられた課題であって、自発的なものではなかった」ということだ。これは本プログラムの一つの限界であり、また長所でもあると

考える。フォーラムでは、森山先生からあらかじめ考えるべきポイントを与えられた上で、短時間で情報を収集して話し合いに臨んだ。この準備期間がより長ければ、また話し合いの機会がより多ければ、活動を通した自身の考え方の変化に一人一人が向き合い、それを共有することや、新たな問いを自分たちで生み出し検討することができたのではないだろうか。今回の短時間の活動では、与えられた課題をただこなすという姿勢が拭えなかったように感じる。ただし、課題を与えられることで、自分からは触れようとしたくないような話題に意識的に切り込むことができたという点では、この活動は大きな意義を持っていた。これは文化理解と教育実習という一見異なる活動を組み合わせた本プログラムそのものの長所に読み替えることができるだろう。筆者は元々日本語教育の実習を行うために本プログラムへの参加を決め、韓国のことばや文化に対してはそれほど強い興味を持っていなかった。しかし前半の韓国語研修に参加する機会や釜山の街で暮らすという環境を与えられたことで、本プログラムがなければ得られなかった、得ようともしていなかったような経験を積むことができたし、韓国に対する興味や理解が深まったと感じている。

最後に、日韓・東アジアの共生という観点に触れる。前述したようにフォーラムでは日韓の情勢について話し合ったが、各国の報道の違いについて扱った場面で、釜山外国語大学の学生が日本で報道されているある情報について「知らなかった」と率直に語ってくれたことが印象に残っている。それは韓国側からすれば不利になるような情報だったが、彼らは闇雲に否定するのではなく、事実の認識の違いをしっかりと受け入れ歩み寄ろうとしてくれた。反対に、情報を集める中で、どれだけ中立的に考えようとしても、日本にとって不利になるような情報に対して「でも…」と母国を擁護する言葉を考えようとする自分がいることにも気づくことができた。自らのマイナスの感情を認識することも含め、事実や相手、自分自身をニュートラルに見つめようとする姿勢が、日韓、ひいては東アジアの共生を目指す上で重要だと考える。

4. おわりに

プログラムの期間全体を通して、最悪と言われる日韓関係の中でもそれぞれの意志を持って日本語の学習・日本文化の理解に努める多くの学生に接し、街中でも日本人に好意的な多くの韓国人の方々と出会うことができた。政府同士がどれだけ反発しあっても、市民レベルの友好関係は十分保つことができるという確信につながる滞在にもなったと感じる。

森山先生、S先生をはじめ、本プログラムへの参加にあたってお世話になった方々への感謝を述べて結びとしたい。本当にありがとうございました。

複言語・複文化プログラムを通じて

1. 韓国のことばと文化を学んで

先にことばについて述べ、その後文化について述べたい。

まず、ことばに関してだが韓国語を学ぶことで、学習者の視点を再認識したと共に日本と韓国は同じアジアの国という認識が強まった。これらについて以下で具体的に述べる。

私は高校3年生の時にK-popが好きになり韓国語を趣味で学習していたが、大学で講義を取るなどして本格的に学んだことはなかった。よって、今回の韓国語研修で実質上初めて体系的に韓国語を学んだが、趣味としての韓国語と学問としての韓国語は全く違った。韓国語を学問として学び、自分自身が細かい文法項目に躓いたことにより、初めて学習者はそういった点に躓きやすいことを知った。

例えば、数え方だ。飲み物の場合は日本語の「杯」にあたる「잔 (ジャン)」、服の場合は日本語の「着」にあたる「벌 (ボル)」、というように使い分けがある。また、敬語に関しても、日本語の「食べる」の尊敬語が「召し上がる」と不規則変化するように、韓国語も「食べる」の尊敬語は原形とは全く異なるものだ。そのため、一つ一つ覚えるしかない。

このように、韓国語学習を通して、日本語ひいては外国語を学ぶ学習者の視点を再認識することができた。特に学習者にとって何が難しいのか等について考えを巡らせることができるようになった。それと同時に、前述してきたように韓国語は日本語とかなり似た考え方を共有していることを知った。韓国語を学ぶことで「日本と韓国はやはり同じアジアの中の国」という認識がより強まった。

次に、文化に関してだが、韓国の文化は複雑ということを実感した。どんな文化も複雑だが、韓国のそれがより複雑に感じる要因の一つとして政府と民間の考え方の錯綜が挙げられる。

現在、政治レベルでは日韓関係は戦後史上最悪といっても過言ではない。それにより、日本製品の不買運動や日本旅行に行かないといった民間を巻き込んだ大規模運動が政府主導で推し進められている。この点では政府と民間の考えは一致していると言える。「NO ABE」のポスターや日本人入店お断りの店が実在し、実際に入店を断られた日本人がいたことも知っているが、訪韓した日本人を韓国人全員が疎外するかと言えばそれは否だ。韓国語研修の一環で慶州に旅行で赴いた際、入ったカフェでの出来事が良い例だ。店主にどこから来たのかと問われたため、日本だと答えたところ「만가워요 (パンガウォヨ)」、日本語訳すると「お会いできて嬉しいです。」と言っていた。韓国では初対面の人や思いがけず出会った時に使われる定型文ということを知ってはいたが、日本人と知ってもなおそう言ってもらえたことが嬉しかった。また、大邱へ旅行に行った際に入ったホルモン屋でも日本人だと知るや否や、店主が「これは日本にない味だろうから食べて」と言って次々に奢ってくれ、美味しい食べ方まで伝授してくれた。

これらの経験から、民間は政府に賛成して活動に参加してはいるものの、日本人全員を悪として見ているわけではなく、それぞれの考えに基づいて行動していることを知った。韓国人は反日だという日本の報道を見てから渡韓した私は初め混乱していた。だが、韓国は政府と民間の考えが必ずしも一致しない文化であると理解することにより、混乱は収まった。文化は一言で簡潔に表せるものではなく複雑怪奇なものであり、確執深い日韓だからこそお互いの文化や考え方をより知る必要があると強く思った。

2. 日本語教育実習

私は副専攻で日本語教育を選択し、大学では理論を中心に学習を進めていた。そして、今回のプログラムで初めて理論を実践する実習に臨んだ。そこで感じたことは2点ある。1点は学びと実践の両立の重要性で、もう1点は日本語教育の圧倒的な後進性である。

まずは1点目に関してだが、理論を学んでいるだけでは現場でどのような反応が返ってくるかわからない。そのため、どこを改善すべきかわからないが、実際に使用してみることでその問題は解決される。またその逆も然りだ。最新の理論を知らずに現場に立って教えているだけでは、学習者は効率よく目標言語を習得することができない。

目標言語を目標言語で教える直説法のメリットは目標言語で目標言語を学ぶことができることだが、デメリットとしては理解が及ばないことがあると大学で学んだ。頭ではそれを理解しているつもりだったが、実際直説法を実施するまでは現実味を帯びていなかった。しかし、今回の実習で日本語教師の意向と私の韓国語能力不足もあって直説法で日本語を教えたことで理解した。特に直説法のデメリットを私は実感した。

目標言語は目標言語であり、学習者の母語ではない。これはつまり、抽象的で複雑な事柄を理解するためには目標言語での説明は不十分であり、母語での説明の方が理解するという点では有利ということだ。実際、「遠慮」はどういう意味か説明できるか韓国語母語話者の日本語学習者に尋ねたところ、韓国語でなら説明できるが日本語では難しいといった回答を得た。これはつまり、遠慮という概念を学習者の母語で理解しているということであり、同時に直説法の限界も意味する。しかし、日本語で理解していないからといって概念を理解していないのかというそうではない。理解の仕方には様々なアプローチがあり、複雑な事柄を理解する点において、学習者にとっては学習者の母語で理解することが最も効率的なのだろう。ちなみに、最近の英語教育では理解における母語の効果が認められつつあり、活動内容によっては積極的に母語の使用を取り入れている。

このことから、理論を改善・発展するために必要な学習者の反応を得られる実践の大切さ、学習者に効果的な言語教育を施すために教育法や理論を学ぶことの大切さ、この両方が必要だと学んだ。どちらかが欠けても不完全な教育になるだろう。

次に、日本語教育の後進性だが何と比較して遅れているかという点と英語教育だ。先述したように、英語教育では母語の使用が理解する点で効果的だと認められ、積極的に現場でも実践されている上に理論としてもどんどん発展している。それにも関わらず、日本語教育では未だに目標言語学習における母語の使用は相応しくないとされている。少なくとも、私は今回の実習や実習後に頂いたフィードバックからそれをひしひしと感じた。日本語教育内で現在主流とされている理論が改善されない、または新しい理論を多くの日本語教師が知らないままでは、学習者は効率的に目標言語である日本語をうまく習得できない。これは巡り巡って日本語教育を衰退させる要因となるだろう。今後も日本語教育が発展していくためには、現場に立つ日本語教師が実践だけでなく最新の理論を学ぶ必要がある。また研究者も最新の理論を発表して終わりではなく、自ら現場に赴いて現状を把握し、日本語教師等の現場に立つ人へ最新理論の普及活動を心掛けねばならないだろう。

以上の2点を日本語教育実習から私は学び、感じた。

3. 複言語・複文化プログラムについて

本プログラムは日韓のことばや文化の相互交流という点においては優れたプログラムといえる。一方で、時間に限りがあったため深掘りできなかった点は限界点といえる。

まず、私を含めた本学の学生は前半の韓国語研修に参加した後、日本語教育実習に移る。これにより、自らを教師であると同時に学習者であるという認識を抱くことができる。一般的に教師は学習者に対して一方的に知識を与えるイメージがあるが、本来は教師と学習

者は相互的に教え合い学び合う関係でなくてはならない。これを本プログラムでは実現していると考える。

また、実習前に韓国語研修に参加するだけでなく、日韓学生フォーラムで韓国人学生と直接話をする機会があったことも相互交流という点において重要だろう。

日韓学生フォーラムで今後日韓関係を回復させ、友好関係を築くには森山先生は主に3点が必要だと仰っていた。「お互いにお互いの非を認め、クリティカル・客観的になる」、「腹を割って話す」、そして「今日の自身の考えは周囲の環境により形成されたものであると気づく」の3点だ。

実際、日韓学生フォーラムでは互いの国での報道内容を比較し、それぞれの良い点と悪い点を洗い出した。その上で今後どうしていくべきかを話し合ったため、非常に客観的かつ忌憚無き意見を出すことができた。さらに、自国の報道内容を見つめ直すことで韓国や日本に対して抱いていた偏見は報道やそれによって影響された周囲の人々によって形成されていたのだという気づきを得た。また、互いに非難し合うのではなく、改善策を探すことが目的だと予め伝えられていたため、誰一人として糾弾し声を荒げるような人がいなかったのは印象的だった。ここがマスメディアと学生同士の交流の違いかもしれない。

限界点についてだが、韓国語研修も然り、日韓学生フォーラムも然り、全てにおいて文字通り時間が不足していた。数週間では韓国語は身につかないし、韓国の文化も表面的な部分しかわからない。しかし、韓国語の習得や韓国文化についての調査が目的ではないため、教師と学習者の両者の視点を養うという点でいえば致し方がないのかもしれない。

フォーラムに関しても、数時間で話すにはあまりにも議題内容が重すぎたため、互いに持ち寄った情報を共有・整理するだけでかなりの時間を必要とした。その上、話し合うとなると本来は1日あっても足りないくらいだが、30分程度でまとめなければならなかった。今後も日韓学生フォーラムを開催する予定なら、情報共有と討論の時間をそれぞれ最低でも2時間ずつ確保すべきだろう。そうすることで、さらに問題への認識が深まり、より良い話し合いができると考える。

しかし、時間が足りなかったとはいえ、教師と学習者の視点を得ることができたことに加え、日韓関係を再考する良い機会になった。6週間で私のアイデンティティーが変わることはなかったが、少なくとも同じアジアの国として共生していかなければならないと考えられるようにはなった。また、こういった思いを若者が抱き、将来的にそれを実現させていくことが今後より良い国家関係を築く上で重要になってくるだろう。本プログラムはそうしたきっかけになる種であり、不安定な情勢の中でも安定して継続していくことを願う。

4. 最後に

本プログラムに参加できたことは私の大学生活の中でも大変意義のあるものだったと心から感じております。このような素晴らしいプログラムを企画・運営して下さった本学及び釜山外国語大学の職員の皆様、チューターを務めて下さった韓国人の学生たち、院生の方々、そして私の両親や親戚、知己に御礼申し上げます。

日韓関係は最悪でしたが、日韓の学生の関係は良好だった印象が強く残っています。私が授業を担当したB1-1のある女学生に「今は日韓関係が良くないけれど、私は日本が大好きだから日本語も日本文化も学んでいます。早く両国の関係が良くなってほしいです。」と言われてハッとしました。どんな時も状況を変えていくのは人の心です。願い続ける思いはいつか状況を変えていきます。言語や文化にはその力があると私は信じています。今回の実習を通じて、その女学生の言葉を聞いて、私はそれを強く実感いたしました。一刻も早く我々学生の願いや思いが力に変わり、状況を変えていくことを願って本レポートの締め括りとさせていただきます。ありがとうございました。

<参考文献>

- 池田和弘. “英語学習には欧米でも「母語を活用すべし」の声”.
日経ビジネス. 2017-3-25.
[<https://business.nikkei.com/atcl/skillup/15/093000004/032300039/?P=1&fbclid=IwAR34V4sIaWLzBY1PV-WwU7gF3z-8Vxgh-ZnCVbpJzJvgLQxJxdhsYqyoGf0>] (参照 2019-9-15)
- 染谷泰正 (2007) 「英語教育における母語の扱いについて～メタ言語能力を育てるための“CA+1”の英語教育の勧め～」『Interactive』23号、7-9.
- Nation, P. (2003). The role of the first language in foreign language learning.
Retrieved 15th Septembere, 2019, from
[https://www.asian-efl-journal.com/june_2003_pn.pdf]
- Turnbull, M and Dailey-O' Cain, J. (2009) First Language Use in Second and Foreign Language Learning. Second Language Acquisition. 131-132.
Retrieved 15th Septembere, 2019, from
[<https://majdi123.files.wordpress.com/2010/11/184769196x.pdf>]
- Yadav, M. (2014). Role of Mother Tongue in Second Language Learning.
International Journal of Research Vol-1. 572-582.
Retrieved 15th Septembere, 2019, from
[<http://citeseerx.ist.psu.edu/viewdoc/download?doi=10.1.1.892.7707&rep=rep1&type=pdf>]

複言語・複文化プログラムを通じた学び

1. 韓国のことばと文化を学んで

まずは前半の韓国語研修について、授業や交流会などを通して学んだことや感じたことを述べる。同時に韓国での生活について感じたことも述べる。

私は韓国語を学んだことがなかったため、渡韓前にせめてハングルだけでも読めるようにしていった。その他の文法などはほとんど分からない状態だったが、授業はレベル別に分かれていたため、自分のレベルに合った授業を受けることができた。私は初級のクラスだったため、先生は韓国語以外にも英語や日本語を混ぜながら授業をしてくださった。しかし韓国語はほとんど分からないため理解するのは容易ではなかった。私は以前中国に交換留学をした際、同様に直接教授法の語学の授業を経験したことがあった。そのため、授業で言語が分からないこと自体にストレスは感じなかった。むしろ、分からないことは調べるなどして、吸収しようとすることに必死だったと思う。過去の留学で、直接教授法の語学の授業を受けた結果、語学の伸びを感じた経験から、今回も韓国語で授業を受けることができたのは良かったと思っている。やはりこのような語学の授業だと、授業で大量に言語のインプットを得ることができるのが大きな利点である。さらに現地で生活しているためアウトプットがすぐにできるというものもこのような環境でしか実現できないことだ。

授業は午前中のみであり、午後の活動のほとんどを占めていたのが交流会であった。交流会は留学生4人に対し釜山外国語大学の学生がバディとして1人付き、計5人グループで行動をし、様々な場所へ行き交流を深めるものだった。交流会が計7回ほどあったため、少し回数が多いのではと思うときもあった。しかし回数を重ねていくうちにグループのメンバーと仲が深まっていき楽しい時間が過ごすことができたと思う。交流会を経て、釜山の観光地や名物の料理などを堪能することができたことも良かった。バディの学生が実際に美味しいお店や安いお店を教えてくれ、一緒に楽しめるというのは旅行者として来ていたら味わうことのできない体験だったと思う。日常会話で使う韓国語や釜山の方言を教えてもらうなど、多方面でたくさん助けてもらったことには本当に感謝している。その他にも文化体験として韓国料理や伝統音楽、韓服体験などのプログラムが組み込まれており、非常に充実していた。

釜山での生活は、前半は釜山外国語大学の寮に滞在し、後半はゲストハウスに宿泊した。寮での生活で大変だったのは食事であった。寮には食堂があったものの少し値段が高いと感じていた。また寮以外の食堂は夏休みで閉まっていたため食べるところが他に無かったのが残念だった。一方、コンビニで売っているインスタント食品ばかり食べていても身体によくないということも実感した。そのため、後半のゲストハウス生活ではキッチンを利用して自炊をするようにした。前半で住んでいた寮の設備に関しては概ね満足していたので、食事の選択肢や、キッチン等があればより良かった。しかし辛い食べ物が好きな自身にとって韓国料理はとても美味しく、毎日食べることができたことには大変満足している。また後半のゲストハウスでは、他の宿泊客と様々な出会いや交流があったことが印象的だった。様々な国から来たゲストが宿泊していたため、韓国語だけではなく、英語や中国語などを交えてやりとりをしたことが、まさに複言語的な実践であり、寮生活とはまた違う貴重な経験をすることができた。総じて、韓国語が分からない生活にはストレスを勿論感じていたものの、思っていたほど悩むことはなかったと思う。過去の留学中にはストレスにうまく対処できないことがあったのだが、今回は自分の中で対処法を見つけて実践するなど、適度に発散できていたことは、今後の生活にも繋がる収穫だと思った。

2. 日本語教育実習

後半の日本語教育実習は約 10 日間という短い期間だったが、振り返ると毎日が忙しく充実しており、前半の研修とはまた違った濃さのあるプログラムであった。

これまで日本語教育の副プログラムを履修してきて、様々な理論や教授法について学んできたものの、実際に教壇実習を行うのは今回が初めての経験だった。そのため、実際に学習者に日本語を教えるとはどういうものなのか、始まるまで全くイメージがつかなかったというのが正直な気持ちであった。事前授業でも CEFR の考え方や、過去の教案例などを参照したものの、やはりそれは紙に書かれたものでしかなく、実際の様子は想像できなかった。今考えれば、事前授業の際に過去の実習生の授業を映像で見てみることや、本学では留学生に対しどのように日本語を教えているのか見学することもできたのではないかと思った。

そのような不安を抱えつつも、実習を担当してくださった釜山外国語大学の日本語の先生とは、前半の韓国語研修中から連絡を取らせていただき、事前に実習に関する情報を伺うことができた。釜山外国語大学の日本語カリキュラムでは、CEFR に基づく Can-Do-Statement からシラバスが作られている。教科書もなく、先生によって授業の方法が全く異なるということは私にとってとても新鮮であった。そのため授業見学をした際は、先生によって異なる個性を参考にし、いかに自分がやりたい授業に取り入れていくかということ考えた。私を担当してくださった先生のキーワードは、「自分の得意分野を生かす」ことだったと思う。私がやりたい授業の内容に関しては比較的自由にさせていただいたかわりに、授業方法の面で様々なアドバイスをいただいた。授業開始前に音楽を流すなどのルーティーンや、もし A パターンがうまくいかなかった場合の B パターンはどうするか、など、あらゆる事態にどう対処していくかという実践的なことを教えていただいた。また、授業以外でもたくさんお話をさせていただき、韓国での生活をすごく気にかけてくださったことにも本当に感謝している。担当の先生だけでなく、他の先生方の様子を身近に拝見したことで、韓国で日本語教師としてどのように生活しているのか、大学で日本語を教えるいくなかでどのように学生と接しているのかなど、その姿を学ぶことができた。

私が授業で担当したクラスは B1-1 という中級レベルであった。ただ B1-1 はクラス数が一番多く、学生のレベル差が大きかったのが印象的であった。実際に私が担当したクラスの中にも、日本語能力試験 1 級を既に持っている学生もいれば、これから 3 級を受ける予定の学生もいた。そのため、実際に授業をしてみなければ、どんな学生がいて、どのような雰囲気のクラスなのか、やはり全く分からなかった。その中でも、数回の見学からおとなしい印象のクラスだと思っていたため、授業の初めにアイスブレイクなどをして気持ちを高めることや、教室の前に座ってもらい、反応を拾いやすくする工夫をした。実際に授業では思っていたより反応してくれる学生が多く、とても助けられた。一方で、教案通りの時間で進まなかったり、早口になってしまったりと、多くの点で至らない部分があった。一人で授業をマネジメントするのはこんなにも大変なことなのか、と身を以て体感した。授業の際には、学習者がどの単語や文法を知っており、どのように伝えたら分かりやすいのかということはずっと考え続けていたと思う。

また、教案作成の際に悩んだのは、Can-Do-Statement をいかに授業に取り入れていくかということであった。私自身が今まで外国語の授業を受けてきて、「実際に使えることを学びたい」と思っていたため、学習者にとってもそのように実際に使える日本語を伝えたいと思っていた。しかし、自身が考えた「自己紹介」や「部屋探し」は、「日本に来ないと使えない」ものに偏ってしまったのではないかと思った。事実、担当したクラスでは、まだ留学や就職を考えている学生が少なかった。そのため、もう少し教案のハードルを下げて良かったかもしれない、と悩んだ。しかし、授業後に学生にとったアンケートでは、多

くの学生から逆に「内容は理解できたし、簡単だった」という意見をいただき、先生と学生の間にあるギャップに戸惑った。学生は拙い授業でも多くの反応をくれたのでありがたかった。しかし少しの間しか関われなかったのもっと一人一人と接したかったという後悔も残る。授業は先生だけで作るものではないということを改めて感じる事ができたと思う。

また、教案を作る際に私は行動中心アプローチを意識していたものの、実際にそれを意識して教えている先生はやはり多くないのかもしれないと感じた。典型的な、語彙を導入し、文法を覚える、というような授業をしている他校の実習生も多かったように思う。事前授業で先生が仰っていた通り、教授法はCEFRに基づいてはいるけれど、少し形式的になっている部分もあるようだった。実際に担当の先生から、一度プリントを作って使い回すことになることや、若い先生が新しく来る事があまりないためマンネリ化してしまうこともある、ということも伺った。しかし、実際に身を以て体感した通り、100分の教案をつくるだけで精一杯であり、先生としても常に新しいものをやりたくてもできないという状況があるのだろうと思った。教師という仕事は本当に想像できないほど様々な苦労があるものだという事も体感した。

ここまで教授法に触れてきたが、やはり日本語を教える基本の言語の知識がないことにも気がつかされた。日本人だからといって、日本語の知識が完璧なわけではなく、今回の実習で改めて得た知識も多かった。実際に教えるためには、教授法だけじゃなくやはり知識が必要であり、常に学ばなければいけないということも学んだ。

3. 複言語・複文化プログラムについて

今回の複言語・複文化プログラムについて、長所と限界、それに対する改善策を述べる。総じて、韓国語研修のみでも、教育実習のみでも、このプログラムは成立しないということを実感することができた。現地で生活をしながら、予め韓国語や韓国の文化について少しでも理解したうえで、日本語を教える実習に臨む、というプログラムの目的は今後も継続して行うべきだと思う。このプログラムを振り返ると、いきなり教育実習を行うより、韓国の言語や文化への理解があるほうが確実に実習の内容も良いものになり、気持ちの面でも余裕をもって臨めると思ったからである。

また私自身にとって良かった点は、自身の複言語・複文化能力を駆使して生かすことのできる場面が随所にあった点である。私は中国語の学習経験があったため、それが韓国語の学習にも大いに役立った。韓国語・日本語・中国語はお互いに共通点のある言語である。韓国語の漢字語だと、日本語由来のものが多く、そうでなくても中国語の発音に似ているので覚えやすかった。日本語話者である私が、中国語と韓国語をどちらも学んで気がついたことは、表意文字と表音文字の違いである。表意文字である漢字の情報量は、表音文字であるハングルに比べて圧倒的に多い。例えば街中で見かける案内や注意書きは、漢字なら一目で理解できるものが、韓国語になると全く情報が得られない。もちろん自身の韓国語のレベルが不足しているということもあるだろう。しかし表音文字を一目で情報を得ることは容易ではないだろう。私たちがひらがなだけの文章を一目で理解することができないことと同じだと思う。私自身、この難しさを感じた。一方で良い点もある。韓国語はハングルが読めれば発音ができるので、注文するときにメニューの文字を読めば通じる。しかし中国語ではそうはいかない。漢字を見て意味が分かって、分かったところで、それを読めなければ注文できない状況に陥るのである。このように自分の中の複言語的な感覚がもたらした新たな発見はとても面白かった。また、教育実習では今まで受けてきた中国語や英語の授業を振り返り、「私はこのような授業は好きだが、あのやりかたは好きではなかった」という記憶をたどりながら、授業法を模索していくことができた。日韓学生フォ

ーラムでは、事前に調べるときに日本語だけではなく、他国のメディアを読むことも実践した。私たちはそれぞれ学んでいた言語が異なっていたため、調べたことを皆で共有しあい、多角的な情報を得ることができた点が非常に良かったと思う。

一方で、本プログラムの限界としてはやはり日本語への偏りが挙げられるだろう。まず、前半の韓国語研修は参加者の9割が日本人だった。今までこの韓国語研修が日本人のみを対象としており、今年は少し門戸を広げたことで台湾やフランスから来た学生もいたものの、それでもやはり多様性は少ないと思った。もし韓国語のクラスにいる日本人が自分だけだったとしたら、日本語は全く通じないため、韓国語やときには英語などの言語を駆使してコミュニケーションを取らなければならない。この場合において初めて複言語能力が発揮されるということは、以前の留学で私が実感していることである。韓国語ネイティブと話すことも大事であるが、非ネイティブとの会話を通じることで、外国語を話すことのハードルを下げることができ（お互いに非ネイティブだからこそ、間違っても気にしなくなる）、まずは間違いを気にせずに伝えることが重要だと気がつくことができる。このような状況があれば、CEFRの本質である、複言語・複文化能力を駆使して社会で自立して生きることの重要性に、より焦点を当てることができるのではないかと思った。しかし、場所が韓国であるということは、やはり日本人の存在は避けられないため、韓国で実施する良さがあると同時に難しさもあるだろう。

また、日韓学生フォーラムについても多くの限界と改善点があると感じた。やはり、何度も言及されていることではあるが、釜山外国語大学の学生が母語でない日本語を使用せざるを得ないために公平ではないという点である。私たち本学の学生が、複雑な議論まで韓国語を用いてできることが一番理想ではあるが、現状として難しさがあるだろう。また、今回のフォーラムに参加して感じたことは、あの議論は本当の意味での対話ではなかったということだ。私は過去に本学と釜山外国語大学校とのビデオ会議の授業を受講してきた。実際の過去の授業では、お互いにビデオ会議で何度か顔を合わせたり、インタビューを通して相手を知っていたり、あるいは授業の最初からグループで活動をしたりなど、ある程度知り、話し合いを重ねたうえで対話ができたと感じる感覚があった。だからこそ、その授業での対話の濃さなどを考えると、今回のフォーラムの対話は物足りなかったと個人的に感じた。韓国側の学生に母語ではない日本語を使ってもらうことを前提にするならば、フォーラムでの議論の方法を改善しなくてはならないと思う。具体的には、議論をするまでもう少し時間をとってお互いに交流ができることが望ましい。フォーラムで議論する内容は決まっていたはずであるから、事前に共有すべきであった。私たちは教育実習がすでに始まっており、事前に調べる時間を捻出するのは容易ではなかった。また韓国側の学生も、事前に私たちとこのような議論をすることを知らされていなかったようで、おそらく彼らのほうが、準備時間が短く大変だったのではないだろうか。そして、議論の時間も足りなかった。私たちのグループでは、日韓問題で起きていることについて、お互いに事実確認をするところから始まり、では政府はこうするべき、というところまでしか話すことができなかった。その先のお互いに日韓関係についてどう思っているのか、今後どうしたいのか、という本音は語れなかった。これは遠慮ではなく、明らかに時間の問題である。やはりあの数時間では、ビデオ会議の授業以上の話し合いの成果は生まれないだろう。そこまでの成果を生み出せないのであれば、あの過密スケジュールの中でこのフォーラムを組み込んでも意味がないと思ってしまう。今年はスケジュール的に調整が難しいことがあったかもしれないが、実際に会って対話ができるからこそその利点をより生かすことができればよりよいフォーラムになると考える。

4. その他、感じたこと

今年のプログラムは、日韓関係が最悪の中で行われたため、異例なこともあったと思う。私自身はこの情勢の中であつたが特に不安はなかつた。問題であるのは政治のことであり、市民はそこまで感情をあらわにしないだろう、と思つてゐた。(しかし実際、釜山でも日本人の入店拒否があつたという事実を知つたときには驚いた。) この情勢の中で渡韓して、やはり自由に身動きがとれなかつたと個人的には思つてゐる。情勢だけではなく、もちろん言語の壁があつたことのためらいもあつたかもしれないが、何かに巻き込まれてはいけないのだ、という緊張感が常にあつたように思う。

また、釜山外国語大学校の環境に触れ、多くの刺激を受けた。日本語の授業はレベル別に分かれてゐることやネイティブの日本語教師から教えてもらえることなどにおいて、外国で外国語を習得する環境がとて整つており、羨ましくも思つた。また驚いたことは、日本に就職を望む学生が多いことである。後半のチューターだつた4年生の学生も日本の就職をしたくて就活をしており、既に日本企業から内定をもらつてゐる学生もいた。また、日本への留学においても本学はとて人気であるということも新たな発見であつた。語学を学び、海外へ出て働きたいという学生がこれほどまでに多い環境は他にあまりないよつに感じ、少なくとも本学にはない側面を見ることができた。そのため、ここで学ぶ学生にとつては恵まれてゐる環境だと感じた。海外に行きたいという気持ちは私もずっと持つてゐるため、彼らからはとて刺激を受けた。彼らが頑張つてゐるよつに、私自身も外国語の勉強をするモチベーションができた。

そして、私がとて嬉しいと感じるのは、今回だけで終わらない関係がずっと続いてくれることである。プログラムで関わつた学生と、「日本でもまた会おう」や「また韓国に行くね」といつた会話ができることはとて嬉しく思う。そのような繋がりが私はとて好きであり、今後も大事にしたいことである。また、個人的には、学部4年の夏休みという最後の時期にこの実習に参加できたことを嬉しく思う。大げさかもしれないが、自身の学生生活において集大成ともいえる経験ができ、参加させていただいたことに感謝したい。

最後になりますが、本プログラムにおいて多大な支援をしていただいた釜山外国語大学校・本学の先生方、大学院生の方々、一緒にプログラムを過ごした実習生、全ての方々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

新しい視点とジレンマ

1. 韓国のことばと文化を学んで

釜山外国語大学校での韓国語・韓国文化短期研修を通じて、新しい発見が多くあった。まず、韓国語および韓国語学習についてだが、そもそも私は、留学経験がなく、英語塾に通っていたこともないため、ALTのような先生を除いてネイティブの先生に教わるということ自体が初めてだった。加えて、目標言語の習得を目標言語で習うということも初めての経験であった。最初はわからない言葉ばかりで、理解しきれなかったり、時間がかかったりと苦労したが、ジェスチャーやイラストを通じて、単語が少しずつ分かるようになり、簡単な文章が分かるようになり、段々と先生が話していることが聞き取り、理解できるようになったときの喜びや達成感は非常に大きいものであった。そして、その感情は学習のモチベーションとなり、「もっと知りたい」「もっと話してみたい」と思うようになったのである。本研修に参加する前は、これから習得していこうとする言語で授業を受けて、本当に習得できるのかという不安があったが、実際に受けてみると、最初は苦労しても少しずつ理解できるようになったし、ネイティブの発音やイントネーション、語彙、文章を吸収する時間が多くあるため、学習環境としてむしろ効率がいいように感じた。また、日本での外国語学習と比べて、“実践”が強く意識された内容になっていた。自分の今までの外国語学習では、教科書があり、簡単な会話の場面が書かれていて、文法を習い、問題を解いてみるといった“一連の流れ”がある学習であった。もちろん、授業内のアクティビティとしてペア会話や1分スピーチ、英作文など、アウトプットする機会もあったが、実生活との結びつきが弱く、生活の中で学習言語を使おうという意識が働きにくいように思う。一方で、本研修では「道案内ができるようになる」のような実生活に結びついたトピックが多く、また、実際に学内のカフェで注文をするなど教室の外での活動もあり、Can-doが実現された内容となっていた。そのため、韓国語を使う場面が想定されやすく、授業外の時間にも自然と韓国語を使うように頭が働いたのではないかと感じた。しかし、このような好循環が成立したのは、学習する場や教材だけではなく、先生の存在が強く影響しているように思う。授業中にわからなかったときは素直に「わからない」と言える空気を作ってくれていたこと、それに対して色々な言い換えをして伝えてくれたこと、授業間・授業後にも快く質問に答えてくれたことなど、“学ぶ”ということに対して開いた環境を作ってくれたのは紛れもなく先生方だった。先生方のこの環境づくりがなかったら、途中で挫折していたり、きちんと理解できないまま先に進もうとしていたりしたかもしれない。私は、この経験から、言語学習において、“実践”と結びついた内容であること、加えて“開いた学習環境”を先生と学生の間でつくるのが重要になるのだとわかった。

次に、韓国文化についてである。プログラムとしては伝統衣装、伝統音楽、K-POP(歌、ダンス)、そして、釜山外国語大学校の学生パートナーとグループでの交流会があった。これを機会に新しい音楽に興味を持ったり、伝統にふれたり、韓国の街を堪能したりと、充実した日々を送ることができた。伝統音楽では、実際に伝統楽器を研修参加者で演奏したのだが、楽器の形状はともかく音質は日本の伝統楽器と近く、拍のとり方も似ていたため、親近感を覚えた。また、一緒に音楽を演奏することで、一緒に演奏した人たちとの一体感を得るだけではなく、韓国の伝統にふれ、一員になれたような感覚があった。伝統衣装を着た時には、立場によって恰好が多少異なることや挨拶の仕方を学んだ。現地の人々に倣って実践することで、伝統音楽を演奏したときと同様に、韓国民のひとりになっているような感覚があった。これらに限らず、その国に身を置いて生活し昔から今までの文化にふ

れることは、単純に知識として吸収することにとどまらず、その国の人々がどのように生きてきたのかにふれ、考える機会を得ることなのではないかと思う。もちろん知識として学ぶことは大切であるが、やはり自ら体験してみるということは、より一層その国に寄り添うことになり、同時にその国を理解することにつながるように感じる。そして、相手を理解することは、良い関係を築いて親交を深めることに直結するのではないだろうかと考えた。

韓国生活の中で印象に残っているのは、飲食店や服飾店などでお礼や挨拶をすると必ずと言っていいほど返事をしてくれたことである。私は、これらは“思いやり”を体現した結果なのではないかと考えている。日本では、空気を読むなどの“察する”という文化があり、時に静かに優しさを表現するが、韓国ではどちらかというと行動に表し、思いやりを表現しているのではないだろうか。実際、言葉の壁があったのにも関わらず、道が分からなくなったときには近くまで一緒に来て案内してくれたり、こちらが言いたいことを一所懸命に理解しようとしてくれたりした。あくまで個人の見解ではあるが、日本人と比べて、言語が通じないことに抵抗を感じず、積極的にコミュニケーションをとっているように思う。このことが、挨拶に対して返事をしてくれることにつながっているのではないだろうか。また、韓国は日本よりもスキンスリップが多く、パーソナルスペースも狭い。こういった、人との空間的距離で交流するような風潮もまた、日本にはない思いの表し方だなと感じた。

2. 日本語教育実習

後半には、釜山外国語大学校で日本語を学んでいる学生に、教育実習生として日本語を教えた。まず感じたのは、日本語教育というものを机上で学んだだけと実際の教壇に立つのでは感覚が異なるということである。私が本実習までに受けた日本語教育関連の授業では、第二言語習得や日本語教育の概論を学んでいたのだが、理論として実習の心構えになる部分もあった一方で、やはり目の前の学生を相手に授業を展開するととなると臨機応変に対応しなければならず、頭の中だけでは成立しないということを痛感した。このことを特に感じたのは、授業内で咄嗟に説明を加えたり、質問に回答したりしたときである。例えば、自分が住みたい部屋について作文をし、ペアで共有してもらっているとき、「防音」はどのような表現になりますか」という質問があった。つまり、部屋について“防音”であることを説明するときどのような言い回しをするのかということであったのだが、これに対して私は「防音がしっかりしている」という表現を伝えた。私の担当クラスの学生たちは全体的にレベルが高く、「しっかりしている」という言葉について理解してくれていたため、その場は解決したが、学生のレベルによっては「しっかりしている」という曖昧な表現ではさらに「しっかり」を説明しなければならなくなる。かといって「防音設備が整っている」となると漢語が多く、かえって複雑になってしまう。また、そもそも「防音」のアプローチでよかったのかという指摘を指導担当の先生からいただいた。もしかしたら、隣人が非常識なのかもしれないし、壁が薄いなのかもしれないし、といったように原因や解決は1つではないのである。自分が知っている表現を伝えるのではなく、学生が理解でき、かつ学生が表現したいことを引き出して、それをいかに表現できるようにしてあげられるかが、教員としてやるべきことなのだと感じた。このように、事前準備や知識、理論を超えた部分が現場には少なからず存在しているのであり、そのことは、実際に教壇に立つことで初めて実感できる部分である。そういった意味で、今回の教育実習は、今後日本語教育関連の授業を受ける際に、現場を意識して学ぶことができるようになる、貴重な経験であったと思う。

また、1でも述べたように、先生の空気感が学習に影響することを教員の立場でも実感

できた。1回目の授業では、緊張から早口になってしまったり、表情がこわばったりしてしまったり、2回目の授業では、授業の雰囲気、学生の雰囲気がわかってきて緊張が少しほぐれ、表情もやわらかく落ち着いてできた。それが連動するかのようになり、1回目と比べて2回目のほうが学生の反応も良く、質問も多かったため、臨機応変な対応は必要になるも学習環境としてさらなる日本語力の向上につながるような場になっていたように思う。これは、まさに1で述べたような、先生と学生との間の“開いた学習環境”を少しでも提供できたのではないだろうか。

日本語教育実習の期間には、日本語を学んでいる釜山外国語大学の学生が、実習生一人一人にパートナーとしてサポートしてくれた。学生生活が忙しい中、釜山を案内してくれたり、韓国語・日本語を教え合ったりと充実した時間を過ごすことができた。私のパートナーはA2レベルの学生であったため、日本語で伝えるときには話すスピードや使う単語に気をつけたり、時には韓国語を使ったりしてコミュニケーションをとっていた。このことは、お互いの言語習得はもちろん、私の場合は、実習中に教壇での話し方に対する注意に似たものを得られ、実習の参考になったように思う。また、パートナーとの会話の中で、「つ」や「ざ行」の発音がしづらいことや「始まる」と「始める」、「まで」と「までに」の違いが難しいなど、日本語を学習していく中でつまずきやすいポイントを知ることができ、かつ、どのような例を用いて説明すると伝わりやすいかも勉強することができた。一友人として付き合うからこそ、ネイティブが何気なく見過ごしてしまいがちなことを改めて考えるきっかけが得られるのだと実感した。

3. 複言語・複文化プログラムについて

まず、私は複言語・複文化プログラムというものの自体について、非常に重要な考え方だと考えている。今回で言うならば、韓国語・韓国文化短期研修と日本語教育実習という“教わり教える”かたちになっており、それぞれのプログラム内だけでも得られたものは大きいですが、教わったときに感じたことや気づいたことが教えるときに役立ったり、反対に教えるときに感じたことや気づいたことを今後学習者側に立つときに意識できたりと、相互的かつ相補的なものになっていると実感した。こういった利点がある一方で、韓国語・韓国文化短期研修と日本語教育実習の両方に参加している大学がお茶の水女子大学だけであるという点は本プログラムの限界として挙げられると思う。私たちは、複言語・複文化プログラムであるということ意識して、前半・後半につながりをもって取り組むことができたが、一緒に参加している大学が前半と後半で異なり、かつ複言語・複文化プログラムという視点はないため、大学を超えて複言語・複文化というものについて話す機会がもちづらいのである。同じ大学がどちらも参加するというのは現実的に厳しいとしても、複言語・複文化プログラムという考えがより多くの人と共有できたら、その考えについて、多様な意見を交換できたのではないだろうか。そして、教育でいうならば“教わり教える”、国規模でいうならば“日本と韓国”といった、“双方の視点をもつ”ということは、教育に限らず、国際関係を築きあげるなど、様々な場面で必要なことであると考えている。日韓関係が良くない今だからこそ、双方向の視点を持つことは重要であるし、複言語・複文化という考えを参加者内で共有できたら、今後の日韓をつなぐ架け橋により一層近づけるように思う。

国際関係ということに視点を絞ると、日韓学生フォーラムへの参加が非常に重要な経験となった。日韓学生フォーラムの講義の中では、“共に生きる”ということを軸に現在の日韓関係悪化の原因とその改善策の考察がなされており、自分一人で両国の報道に向き合っているときよりも客観的にこの問題をとらえられたように感じた。また、このような場を設けていただくことで、センシティブな内容について日韓の学生同士で話し、生の声で考

えを共有することができたのは、今後日本で日韓関係を考えるときに重要な要素になると感じた。ただ、話し合いの時間がもう少し長く設けられているとおよかったように思う。特に、日韓学生フォーラムの時間は同じ場所・時間に十人単位で人が集まっており、個人やグループだけでは出ないような考えや意見が共有できる場である。グループを途中で変えてみたり、何か一つ出た意見について全体でさらに掘り下げてみたり、あるいは学生から全体の話し合いの進行をする人を出して進めてみたり、といったことも実践できたら、日韓関係をよりよくするために必要なことを、より具体化することができたのではないだろうか。しかし、それでも日韓関係について講義を聞き、学生同士で話し合う場があったことで、報道されている諸問題について認識の違いがあることを理解できた。例をあげると、慰安婦問題に関する謝罪について、日本からすると謝罪をし、賠償金も支払ったから解決済みとの認識であるが、韓国からすると、謝罪をしたから“解決”という問題ではなく、また、“解決”というのは無理であろうという認識であると知り、報道にあるような「謝罪をした、してない」という問題の根にある“謝罪”ということについて理解し合えたということがある。また、私のグループにいた韓国人学生が述べていた「自分はもともと日本が嫌いであったが、日本という国がどういう国なのかを理解していくにつれて好きになった。だから相手を理解することが重要だと思う。」という話が印象に残っている。日韓学生フォーラムの講義でもあったが、まず相手を知り、理解するということがよりよい関係を築くために重要なのだと改めて感じた瞬間であった。日韓学生フォーラムを通じて、韓国側の捉え方を知り、相手と“違う”ということに抵抗せずに受け止め“共に理解する”という現在の日韓関係問題を見つめ直す新しい視点を得た。そして、この“違い”には、日本と韓国といった国の違いだけではなく、己の認識と事実との違いも含まれているのだということもわかった。この経験をふまえると、やはり今回のような民間レベルの交流は続けていくべきだと確信している。一方で私は、このような新しい視点の獲得と共に、日本に帰国してから葛藤している。韓国から日本へ帰国し、今回の、特に日韓学生フォーラムでの経験をもとに、知人と日韓関係について話をする機会が何度かあった。しかし、自分が韓国で経験したこと、韓国人学生との交流で聞いたことなどをふまえて、韓国側の認識を伝えても、なかなかすっきりとした納得を得られることはなかった。私自身、韓国を訪れる前は、日韓関係の改善に向かっていないとは感じつつも、韓国側の態度に疑問があり、韓国側の立場をまず理解するということができていなかった。自分についてだけであれば、今回の訪問を契機に理解するという意識するように変わったが、現地を見ていない周りの人からすれば、私がいくら伝えてもすぐには意識を変えられないだろう。仕方ないことではあるのかもしれないが、このことは、私の中で帰国後のジレンマとなっており、また、民間レベルの交流を続けていく中での一つの課題であるようにも感じた。現地を訪れていない人に、どうやって伝えていくのか。悔しいことに、現段階では解決策が見いだせていないが、自分の経験を内に秘めず、糧にして、地道に伝えていくことをあきらめずに続けていきたいと思う。

4. その他

最後に、最悪の日韓関係の中で訪韓したことについてふれたい。これまでに述べたこととも重なるが、自分の足で現地に行き、自分の目で見るということがいかに重要かわかった。報道にあるようにデモが行われていることやNO JAPANがあることも事実であるが、一方で、お店で丁寧に調理方法を教えてくれたり、優しく話しかけてくれたりという人々のあたたかさがあることもまた事実であった。今回の訪韓によって、マスコミュニケーションの偏りや影響力の強さを実感するとともに、自らで事実を見つめ考えることの重要性を痛感した。